シチリアの夕べ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シチリアの夕べ

【Ｎコード】
Ｎ３１９９Ｒ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
失恋を癒す為にシチリアに来たエリー。その彼女がシチリアで見たものは。ヴェルディのオペラからヒントを得た作品です。

第一章

シチリアの夕べ

エリーは遠いこの国まで来ていた。
イタリアの長靴の先の石シチリア。そこにいてだった。
一人バーで飲んでいた。そこで明るい顔立ちのマスターに声をかけられた。
「あれっ、お姉さん」
「はい」
「イギリス人だね」
こう言われたのだった。
「違うかい？」
「わかるのかしら」
「うん、わかるよ」
背が高くすらりとしてそれで赤い髪を長く伸ばしている。長い睫毛の目の色は奇麗なグリーンである。鼻がとても高く彫がかなり深い顔だ。
そしてグレーのズボンにスーツ。その格好の彼女を見ての言葉であった。
「ちゃんとね」
「何故わかるのかしら」
「顔でね」
それでだというのだった。
「それでわかるよ」
「顔で？」
「顔っていうか雰囲気かね」
マスターはまた彼女に言ってきた。
「それでわかるんだよ」
「そうなの」

「何処か堅苦しいところがあるからね、イギリス人は」
その雰囲気とはどういったものかも話すのだった。
「だからね。それでね」
「堅苦しい、ね」
「しかもあんたは」
そのエリーを見ての言葉であった。
「今落ち込んでるかな」
「御名答よ」
エリーはその前にあるグラスを指と指で軽く持ってからだ。こうマスターに返した。
「それもわかるのね」
「それも雰囲気でね」
「雰囲気っていうのは言葉よりもずっとお喋りなのね」
「そうだよ。特にこういう商売をしていたらね」
「そうなるのね」
「うん。それであんたは」
また彼女への話になった。
「その落ち込んでいることを何とかする為にここに来たんだね」
「ええ、はるばるリバプールからね」
やはりイギリスであった。あのビートルズの出身地として世界的に知られている街である。彼等により有名になった一面の強い街である。
「来たのよ」
「霧の国から太陽の国へ」
「その通りよ。確かに太陽が凄く奇麗ね」
「イタリアだからね」
「そうね。それに」
「それに？」
「風景もいいわ」
次に褒めるのはこのことだった。シチリアそのものがいいという

のだ。
「とてもね」
「そうだろ、だから観光地としてやっていけるんだよ」
「そうね。太陽の下に緑と岩場があって」
「からっとしているだろ」
「イギリスとは全く違うわ」
その霧の国とはというのだ。
「イギリスじゃ。こんなに晴れることは」
「やっぱり少ないんだね」
「そうよ。雨と霧よ」
まさにその二つだというのである。
「そればかりよ」
「やっぱりね。じゃあ楽しんだらいいよ」
「このシチリアの風景をなのね」
「いや、全部だよ」
だがマスターはこう言うのだった。
「全部だよ、このシチリアの」
「全てをなの」
「そうだよ。シチリアは風景だけじゃないんだ」
「食べ物やワインもというのかしら」
「勿論。例えば」
言いながらであった。早速ボトルを一本出してきた。それは。

第二章

「そのシチリアのワインだよ」
「赤ね」
「そうだよ、おごりだよ」
笑顔でエリーに話してきた。
「さあ、一本ぐっと飲んでね」
「随分と気前がいいのね」
「イタリア人、特にシチリア人は気前がいいんだよ」
「初耳よ、それは」
「初耳でも事実だよ。だからね」
「飲ませてくれるのね」
「そうだよ。一本気軽にね」
エリーに勧める。そうしてだった。
エリーはそのワインを一本飲んだ。そのうえで店を出ようとする。
その時にマスターが彼女にまた言ってきたのであった。その言葉は。
「多分」
「多分？」
「破れたね」
こう彼女に言うのだった。
「そうだね」
「それもわかるの」
「その落ち込みようはそれだね」
こう言うのである。
「そうだね」
「そうだと言えば？」
「もう一本どうだい？」
またワインを一本出してきたのだった。
「おごりだよ、これも」

「それを飲んでなのね」
「忘れたらどうだい？さっさと」
「忘れられたらね。お酒で」
「失恋はワインで忘れるものだよ」
これがマスターのアドバイスだった。
「とことんまで飲んでね。それで次の恋に生きるんだよ」
「それができればいいけれど」
マスターの言葉に応えながらだ。席に戻りだ。そして彼とまた話した。
そうしてだ。エリーはまたグラスを取ってだ。ワインを飲むのだった。
そのうえでだ。彼女自身のことを話すのだった。
「私はね」
「うん、どうしたんだい？」
「相手がね。ちょっと変わっていてね」
「変わっていた？」
「そう、家庭があったのよ」
そうした相手だというのだ。
「オフィスの上司で」
「おやおや、それはまた」
「結局。彼は家庭を選んだわ」
そのワインを飲みながら話す。
「それで私は。仕事も辞めて今はここにいるのよ」
「不倫の恋が終わって。それで」
「こうなるっていうのはわかっていたわ」
顔は自然に俯いてしまっていた。そうならざるを得なかった。
「けれどね。それでもね」
「辛いのかい」
「本気だった」
この言葉も出した。

「本当にね。本気だったわ」
「そうだったのかい」
「けれど。適わない恋だし、不倫なんて」
「まあそうだね。それで手に入れても結局はね」
「そんな幸せはね。本当の幸せじゃないから」
「そうなるしかなかったね」
マスターも不倫についてはこう話した。
「はっきり言ってね」
「そうよね、やっぱり」
「じゃあ余計に飲むべきだよ」
「さらになの」
「そう、ワインならどんどんあるから」
今は一本だけ出している。しかしそれ以上出してはいなかった。
それでもだ。エリーにこう話すのだった。
「飲むんだね。それに」
「それに？」
「外にも出て」
こうしたことも話すのだった。

第三章

「それでね。癒すといいよ」
「シチリアを見て」
「太陽の光は全てを清めるから」
「全てをなの」
「そう、全てをね」
だからだと。マスターはエリーに話していく。
そしてだ。マスターは言葉をさらに続けてきた。
「だから。シチリアを楽しんでね」
「そうして癒して」
「そう、それから」
さらに言うのだった。
「それからだよ」
「それからって？」
「じっくり考えればいい」
これがマスターの言葉の軸だった。
「これからのことを」
「そうすればいいの」
「まずは飲んでね」
また話した。
「いいね、それで」
「ええ、その言葉に甘えさせてもらうわ」
エリーもマスターの言葉を受けた。そうしてであった。
この日は飲むのだった。そうしてだ。彼女はその日はとことんまで飲んだ。その結果だ。翌日の朝の彼女は酷いことになっていた。
「うっ・・・・・・」
起きるとだ。まずは鈍い頭痛がした。
二日酔いだった。それもかなりきつい。まずはシャワーを浴びて

それから立ち直ることにした。だが結局それから立ち直るには昼までかかった。
二日酔いのまま歩くシチリアはだ。確かに美しかった。
緑の中にオレンジがありオリーブもある。そして太陽もだ。
燦燦と輝く太陽を見ていると何か気持ちが少し変わった。明るくなれる気がした。
しかしそれでも今はすぐに沈んでしまう。破れた恋の痛手は深かった。
それで沈んでいるとだ。周りから明るい声がした。
「これから何処に行く？」
「パスタでも食べる？」
「そうする？」
「ワインと一緒に」
「イタリアだからなのね」
エリーはその言葉を聞いて呟いた。今彼女は山のところを歩いている。白い岩場の上には緑の草がある。その対比が太陽に照らされている。
その中を歩きながらだ。周囲の言葉に呟くのだった。
「だから。そうね」
そしてだった。ここである店に入った。するとだった。
昨日のマスターがいた。客席に座ってにこにことしてパスタを食べていた。
その彼はだ。エリーの姿を認めて笑顔で声をかけてきた。
「いや、久し振り」
「って会ったのは昨日よ」
「昨日でも久し振りだよ」
こう笑顔で話すのだった。
「ここで会ったのも何かの縁だね」
「そうね。多分ね」
「それじゃあだけれど」

「それじゃあ？」
「食べようか、シチリアの料理をね」
こう彼女に提案してきたのだった。
「それでどうかな」
「最初からそのつもりだけれど」
これがエリーの返答だった。
「シチリアに来てるのだから」
「おや、言うねえ」
「シチリアでイギリス料理を食べても仕方ないし」
「ああ、それはないから安心していいよ」
「あったらかえって凄いわね」
「あれかい？トーストに目玉焼きに」
至ってシンプルな食事からだった。朝食である。
「それに紅茶だよね」
「そうよ。後はソーセージね」
「イングリッシュ＝ブレイクファストだったね」
「朝御飯はいいと言われるわ」
こう答えるエリーだった。
「それはね」
「他は？」
「よく観光で来る日本人が困った顔になっているわ」
日本人は悪いことを口に出しはしない。しかし表情に出てしまっているというのだ。

第四章

「フランス人は文句を言って」
「フランス人は何処でもだね」
「イギリスのことが嫌いなのにいつも来るのよ」
これがフランス人だったりする。イギリス人もフランスによく来る。そうしていつもお互いのことを悪く言い合うのである。そんな両国だ。
「たまったものじゃないわ」
「それはまた災難だね」
「最悪よ。それでだけれど」
「うん、それで？」
「そのシチリア料理を注文したいわ」
そうだというのであった。
「何がいいかしら」
「じゃあまずはね」
「ええ」
「ハムとサラミにチーズにサラダに」
最初はそれであった。
「あとフェットチーネだね」
「あの幅の広いパスタね」
「イカ墨がいいかな」
「イカ墨？」
「ああ、まあこれは見てのお楽しみだよ」
エリーがそれについて知らないのを見ての言葉だった。マスターはここでさらに話すのだった。
「それで魚は」
「今度は何かしら」
「鰯がいいな」

今度はそれだというのだった。
「ガーリックとオリーブで炒めたものだね」
「それなのね」
「それと羊のステーキ。ラムがいいな」
メインディッシュまで決まってしまった。
「ケーキは店のお任せだ。ワインは」
「あっ、ワインはいいわ」
そちらは止めたエリーだった。
「二日酔いが酷かったから。やっとましになってきたけれど」
「おや、ワインはもういいのかい」
「折角だけれどね」
苦笑いと共の言葉だった。
「今は止めておくわ」
「そうなのかい。それは残念だな」
「また今度ね」
「じゃあ夜にでも」
マスターは笑ってこう言ってきた。
「飲もうか」
「気が早いわね。もう夜の話なの」
「ははは、気が早いのはシチリア人の長所だよ」
「それが長所なの？」
「そうだよ。早いうちにあれこれ動けるからね」
だからだというのである。
「だからね」
「そういうものかしら」
「そうだよ。それじゃあね」
「ええ」
「食べようか」
笑顔でエリーに言ってきた。
「そうしようか」

「ええ、それじゃあね」
エリーも笑顔で頷いた。そうしてだった。
二人でその料理を食べはじめた。エリーが驚いたのはそのパスタだった。
何とだ。真っ黒だったのだ。まるでインクでもかけたかの様にだ。

それに目を丸くさせてだ。マスターに問うた。
「あの、これって」
「だからイカの墨をかけたんだ」
「イカの！？」
「そう、イカのね」
そうだというのである。
「それがこれなんだ」
「イカって食べられるの」
思わずこう言ってしまったエリーだった。
「それも墨なんて」
「イギリスじゃイカなんて食べないんだ」
「全然。海のものっていったら」
「海といえば？」
「鮭と鱈しか食べないわ」
そうだというのである。
「イカなんてとても」
「じゃあタコもだね」
「そっちも食べられるの」
「美味いよ、何なら後で御馳走するよ」
「考えさせて」
こう返すエリーだった。

第五章

「それは」
「おやおや。謙遜は駄目だよ」
「謙遜じゃないわ。そんなのが本当に食べられるなんて」
「美味しいんだけれどね。実際にそのパスタもね」
「ええ」
「食べてみればいいよ」
エリーに勧める。
「是非ね」
「食べればいいのね」
「そう、食べれば全てがわかるから」
笑顔での言葉だった。
「だからね。どうぞ」
「わかったわ」
エリーは渋々ながらマスターのその言葉に頷いた。そうしてだった。
パスタをフォークに絡めさせてそのうえで口の中に入れる。まずはオリーブとガーリックの香りがした。そしてそれからだった。
口の中でだ。これまで味わったことのない風味が拡がる。それは確かに。
「美味しい・・・・・・」
「そうだろ。美味しいだろ」
「ええ、確かに」
こう言えたのだ。
「こんなに美味しいものなのね」
「そうだよ。イカは美味しいんだ」
「意外ね。墨なのに」
「イカも入ってるよ」

見ればだ。パスタの中には黒くなった小さなものも入っている。その黒さがイカの墨によるものもまた最早言うまでもないことであった。
「それもどうかな」
「それじゃあそれも」
これも食べてみるとだ。美味かった。そして他のものもだ。気付けばケーキが目前に迫っていた。
ケーキはオレンジのケーキだった。マスターはそのオレンジのケーキを見てまた話した。
「このオレンジはね」
「ここのオレンジかしら」
「そうだよ、このシチリアのね」
まさにそれだというのである。
「これはね」
「そうなの」
「やっぱり最後はデザートだからね」
「だからこそのケーキね」
「うん、これも食べてくれよ」
こう言ってエリーにそのケーキを勧めるのだった。
「コーヒーもね」
「コーヒーは。そうね」
エリーは笑顔で彼の言葉に応えた。
「それじゃあ喜んで」
「コーヒーもいいんだね」
「ここはシチリアだから」
「だからなのかい」
「コーヒーをね」
それでだというのだった。
「飲ませてもらうわ」
「イギリス人なのにコーヒーなのかい」

「そうよ。確かに普段は紅茶だけれど」
このことは言った。やはりエリーもイギリス人だった。
「それでも。イタリアだから」
「郷に入っては郷に従えかい」
「何、その言葉は」
「ああ、日本人に教えてもらったんだ」
マスターは楽しげに笑ってこう説明した。
「それでなんだよ」
「日本人になの」
「日本の諺さ」
それだというのである。
「それなんだよ」
「それがその郷に入ってなのね」
「その土地に来たらその土地に合わせる」
マスターはその意味も話した。
「そういうことだよ」
「そうなのね。じゃあやっぱり」
「コーヒーにするんだね」
「そうさせてもらうわ。それじゃあね」
「うん、じゃあコーヒーを」
こう話してであった。そのうえで今はコーヒーを飲むのだった。

第六章

そのコーヒーを飲み終えるとだった。またマスターが声をかけてきた。
「これからの予定は？」
「予定ね」
「そう、何かあるかい？」
「これといってないわ」
そうだというのであった。
「今はね」
「そうなのかい」
「気ままに色々な場所を歩き回るつもりだけれど」
予定とは言えないものだった。確かにそうだった。
「何かあるのかしら」
「こっちも今日はオフなんだよ」
「そうだったの」
「そうさ。それでよかったらね」
「観光案内でもしてくれるのかしら」
「よかったらね」
笑ってエリーにこう申し出た。
「そうさせてもらうよ。しかも」
「しかも？」
「無料だよ」
屈託のない笑顔も見せたのだった。
「これでどうだい？」
「無料ね」
「そう、無料だよ。どうだい？」
「どういう魂胆かしら」
「恋人になりたいとか」

「それはお断りさせてもらうわ」
にこりともせずきっぱりと言い返したエリーだった。
「悪いけれどね」
「おやおや、つれないね」
「タイプじゃないから。それでも言い寄ってきたらその時はね」
「その時は？」
「覚悟しておいて」
言葉に剣呑なものが宿った。
「その時はね」
「おやおや、本当に物騒だね」
「自分の身体は自分で守るのがポリシーだから」
「そうなんだ」
「さっき日本の話が出たけれど」
「うん、シチリアにも日本人の観光客が多いからね」
「その日本の空手をやってるのよ」
本気そのものの顔でだ。にこりともせずに話すエリーだった。
「三段よ」
「三段ってどの位強いんだい？」
「少なくとも大の男にも勝てるわ」
そこまでだというのだ。
「ワインのボトルを手で切ったこともあるし」
「おいおい、イタリア男は色男だから金と力はないんだよ」
マスターはエリーの剣呑な言葉に肩を竦めさせて言い返した。
「そんなか弱い相手におっかないねえ」
「じゃあわかったわね」
「恋人はお断りだね」
「そうよ。そういうことでね」
「よくわかったよ」
マスターは今度は苦笑いだった。
「よくね」

「そういうことだから。けれど観光案内はね」
「そっちはどうだい？」
「受けさせてもらうわ」
ここでやっと微かにだがにこりと笑ったエリーだった。
「そっちはね」
「わかったよ。じゃあ行く場所は」
「何処なの、それで」
「農園とかは回ったかな」
まず尋ねるのはそこだった。
「シチリアの農園は」
「ええ、朝のうちにね」
このことを答えたエリーだった。
「見たわ」
「そうか。それじゃあ」
「何処なの？それで」
「まあついて来てくればわかるよ」
こう答えるマスターだった。

第七章

「それはね」
「おかしな場所じゃないわよね」
「若しそういう場所に案内したら？」
「空手よ」
返答はここでは一言だった。
「それでいいかしら」
「よくわかったよ。空手にしてもボクシングにしてもね」
「お断りなのね」
「だからこっちは弱いんだよ」
イタリア男はというのである。マスターがこう言う背景には二度の世界大戦での祖国のことがあった。イタリアはとにかく戦争に弱いのだ。
「暴力反対だから」
「こっちはナンパ男は反対よ」
「イギリス人は真面目なんだね」
「イタリア人が不真面目なだけよ」
「言うね。まあとにかくね」
「ええ、行くのね」
「そこにね。それじゃあ」
こう話をしてだった。そのうえでだ。エリーはガイドに案内されてまずは店を出てだ。そうしてそれからある場所に向かったのだった。
そこは山だった。シチリアの山である。しかも火山だった。
その火山に来てだ。エリーは言った。
「ここは確か」
「わかったかい？」
「エトナ火山よね」

その名前も話すのだった。
「そこよね」
「そうだよ。ギリシア神話にも出てるけれどな」
「あの火山はここだったのね」
「来るのははじめてだったみたいだね」
「シチリアに来たこと自体がはじめてなのよ」
そもそもこの島自体がだというのだ。
「だから」
「そういうことなら」
「話が早いのね」
「そうだよ。どうだいここは」
その火山の中で話すのだった。
「面白い場所だろ」
「火山なのに」
「ああ」
「人の家が多いわね」
二人は今麓にいる。そこには家だけでなく果樹園もあった。やはりここにもオレンジやオリーブが見える。実にのどかな光景である。
「怖くないのかしら」
「平気だよ、ここはね」
「平気なのね」
「そうだよ。しょっちゅう噴火するけれどね」
「それじゃあ平気じゃないんじゃ」
「いやいや、噴火にも種類があるんだよ」
だからだと。マスターは話すのだった。
「この火山の噴火はそんなに危ないものじゃないんだ」
「火山の噴火ってそうなの」
「イギリスには火山はないのかい」
「アイスランドにはあるけれどね」
少なくともイギリスにはない。そういうことだった。

「あったかしら。どうだったかしら」
「まあこういう山はないか」
「ないわね」
このことはエリーも断言できた。それもはっきりとだ。
「どうしてもね」
「そうかい。それじゃあね」
「ええ」
「はじめて見る火山なのかな」
「ええ、そうよ」
まさにその通りだというのだった。こうマスターに答える。
「実はね」
「そうか。それじゃあ」
「それじゃあ？」
「景色を楽しんでくれたらいいよ」
そうしてくれというのだった。
「この火山のさ。それでどうだい？」
「最初からそのつもりだけれど」
「おや、最初からかい」
「だから来たから」
またマスターに答えた。

第八章

「だからね」
「それでなのね」
「そうかい、じゃあ」
「じゃあ？」
「頂上まで登るかい？」
マスターの提案だった。
「これから」
「火山の頂上まで」
「どうだい、それは」
またエリーに言ってきた。
「それは」
「そうね。それじゃあ」
「いいのかい、それで」
「ええ、いいわ」
笑ってはいない。しかし確かに答えた。
そうしてだった。エリーはまた言うのだった。
「御願いね、頂上まで」
「山は頂上まで登ってこそだよ」
マスターはまた言った。
「さもないとそもそも入る意味がない」
「頂上まで登ってなの」
「そうさ、山は登る為にある。そして」
「そして？」
「そこから下を見ると尚よし」
笑ってエリーに話す。笑わないエリーと比べて実に対象的である。
その笑顔でだ。自分から歩きはじめたのだった。
「じゃあ行くか」

「ええ」
こうしてマスターに案内されて行く。だがその道は。
「うっ、結構以上に高いわね」
「ああ、この山は高いよ」
「こんなに高いなんて」
登っても登ってもだった。中々頂上に行かない。エリーは額に汗を流していた。
自然と酒が抜けてしまっていた。汗を流している結果だ。そうしてその中でだ。自分の先をひょいひょいと進むマスターに言ったのだ。
「見えているよりもずっと」
「まあそうだね」
マスターはここで他人事の様に言ってきた。
「この山はアルプス以外じゃ一番高い山だしね」
「アルプスの他にはって」
「そうだよ。かなり高いからね」
「そんなに高いの」
「考えてみれば」
また言うマスターだった。
「この時間から登って頂上まで行くのは無理かな」
「無理ね、確かに」
これはエリーもわかった。何しろ高い山だ。今は昼過ぎである。それで登ってもだ。頂上まで辿り着くのは夜になるのはわかった。
「これはね」
「じゃあきりのいいところで降りようか」
「山は頂上まで登ってこそじゃないの？」
「イタリア男は頭が柔らかいんだよ」
またこんなことを言うマスターだった。
「だからね」
「いいっていうのね」

「そうさ。まあ夕方まで登って」
「それで帰るのね」
「それでどうだい？」
こうエリーに提案してきた。
「それで」
「ええ、それでいいわ」
エリーもそれで納得した。
「それじゃあね」
「それじゃあそれで決まりだな」
「ええ」
こうしてだった。二人はとりあえず夕方まで登ることにした。
そうしてである。世界は次第に赤くなってきた。白から赤になってだ。
ここでだ。マスターは言ってきた。
「よし、ここまでにしよう」
「降りるのね」
「ああ、降りよう」
エリーに対して言うのだった。

第九章

「これでな」
「そう。まだ少し行くと思ったけれど」
「無理は禁物だよ」
マスターは笑って彼女に話した。
「それはね」
「夜になるからなのね」
「イタリアの夜は長いけれどね」
「それは聞いたことがあるわ」
「けれど危険だからね」
「狼でもいるの？」
「それも大勢」
笑ってエリーに話す。
「山だけじゃなくて街にも出るよ」
「イギリスと同じね、それは」
「けれどイギリスの狼よりもしつこいからな」
「随分タチの悪い狼達ね」
「君が空手を使うことになる」
マスターはここでも笑って話している。そうしてだった。
エリーにだ。こう言うのだった。
「狼達を叩きのめして英雄になるかい？」
「生憎だけれどそれは好みじゃないわ」
「それじゃあ戻ろうか」
「ええ」
こうして二人は山を降りようとする。その時だった。
不意に聴こえてきた。それは。
「これは」
「教会の鐘の音か」

マスターが言った。
「夕刻を知らせる」
「鐘の音」
「下から聴こえてくるだろう？」
「ええ、そうね」
「それだよ」
こう話すのだった。
「それがこの鐘の音なんだ」
「そうなのね」
「どうだい、この鐘の音」
鐘の音を聴きながらエリーに問うた。
「いいかい？」
「ええ、そうね」
エリーも穏やかな顔になって言う。
「奇麗な音ね」
「そうだろ？俺もさ、この鐘の音が」
「好きなのね」
「好きだよ。いつも聴いてるよ」
そうだというのだった。
「開店前にいつもね」
「そうしてるのね」
「教会の鐘の音はいいね」
そしてだ。こう言うのだった。
「心が落ち着くよ」
「心が」
「そう、心がね」
そうなるというのである。そしてだった。
彼はだ。エリーにさらに話すのだった。
「どうだい？気分は」
「今の気分？」

「少し楽になったかな」
彼女のその心に対しての問いだった。
「それで」
「ええ」
エリーは微かに笑ってだ。マスターのその言葉に頷いた。
そのうえでだ。こう言うのだった。
「それでだけれど」
「それで？」
「気が晴れてきたわ」
そうなってきたというのだ。
「少しだけれど」
「少しかい」
「けれど確かにね」
こうも言うのだった。
「そうなってきたわ」
「そうなの」
「飲んで」
まずはここからだった。昨日のワインである。それだけでなくだった。

第十章

「それとお昼も食べて」
「満腹は何もかもを癒すんだよ」
「それでシチリアの景色も見て」
「奇麗だったろ？」
「太陽も奇麗で。緑もオレンジも」
そういったものを見てもだったのだ。
「海もとても奇麗で」
「イギリスの海とは違うのかい」
「イギリスの海はね。暗くて沈んでて」
そうなっているというのである。エリーはイギリスに生まれイギリスで育ってきている。だからこそだ。よく知っているのである。
「こんなに奇麗じゃないから」
「だから余計にかい」
「心に残ったわ」
「それは何よりだよ」
「そしてこの山」
次は二人が今いるエトナ火山のことだった。神話の頃から知られているこの山のことをだ。彼女は今マスターに話すのだった。
「この山もね」
「よかったのかい」
「とてもね」
そうだったというのである。
「いいわ。とてもね」
「じゃあここに案内した意味があったわね」
「山だけじゃなかったから」
「鐘の音かい」
「ええ、それよ」

まさにそれだというのだった。鐘の音は今も聴こえてきている。
その鐘の音の中でだ。エリーはさらに言った。
「この鐘の音が」
「この鐘の」
「そう、鐘の」
またこう話すのだった。
「この音が。一番いいわ」
「鐘の音がね」
「そうよ。聴いているだけで心が穏やかになって」
周りは赤くなってきている。その夕暮れの中でだった。
「落ち着いてきたわ」
「何よりだよ、本当に」
「有り難う」
エリーはマスターに一言言った。
「ここに来た意味があったわ」
「シチリアにだね」
「ええ、あったわ」
こうマスターに言うのだった。
「本当にね。イギリスにも笑顔で帰られるわ」
「それは何よりだよ。ところで」
マスターはここでさらに言ってきた。
「一つ言いたいことがあるけれど」
「何かしら」
「このままシチリアに留まらないかい？」
こうエリーに声をかけた。
「どうだい？それで二人で」
「悪いけれどそれは断らせてもらうわ」
「おいおい、つれないねえ」
「悪いけれど歳が離れてるみたいだから」
「だからなの」

「そうよ、イギリスに帰ってそれでね」
こう話すのだった。
「新しい恋を見つけるわ」
「やれやれ。じゃあ頑張ってくれよ」
「そうするわ。王子みたいな彼氏をね」
「王子？そりゃ止めておいた方がいいな」
マスターはエリーの今の言葉に笑って返した。
「今のイギリスの王子だったらどっちもね」
「どっちもなのね」
「下の王子はそこそこいけるけれど上の王子は。髪の毛がね」
「昔は違ったのよ」
エリーは苦笑いで話した。
「物凄い美少年だったから」
「じゃああの頃の上の王子みたいな相手をかい」
「ええ、探すわ」
夕暮れの赤い世界の中で話したのだった。青い空は次第に赤くなってきており海にもそれが映し出されていた。青いものが赤く変わってきていた。
そして山から見える家々も木々も何もかもが次第に夜の中に消えようとしている。その中の赤い光を見ながらだ。エリーは言ったのであった。鐘の音を聴きながら。

シチリアの夕べ　　完

２０１０・１０・４

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3199r/

シチリアの夕べ

2011年3月2日21時55分発行